

# 火星

平成二十四年四月号

平成二十四年四月一日発行（毎月1回1日発行）通巻八六七号



七曜抄

(八)

山尾玉藻

鳥雲に皆うつむける木偶頭

先を行く人のつまづき水温む

白梅に老妓の息のかかりけり

潮の目の流れてゐたり雛の宿

畦塗つて湖の風光らする

雨ぐせとなりし湖北の種井かな

くつついて大歪みせししやぼん玉

夕さりの桜いつぽんづつ咲ける

朝靄をとどめてをりし白子掘

何もなき丘に遠足散らばりぬ

# 太白星

柳生千枝子

十二月何せんと立ち上りたる  
茶の花の蕊の金色晴れつづき  
森しづか落葉溜りに夕日射し  
バイク音遠ざかり雪舞ひ始む  
ありありと母の夢見し朝の凍  
探梅行俳句手帖を新しく  
落葉踏む遠き武蔵野恋ひわたり

杉浦典子

初能や床踏み鳴らす足袋の白  
二階席に見る男振り初芝居

水の辺にかがみて鴨の胸白し  
涛音へなだる雪の棚田かな  
寒椿竹箒の先反つてをり  
法螺貝のひびける端に厄落す  
厄落しの火の跡雨のしづかなり

浜口高子

極月の立つて座つてひとりなる  
上七軒のこつぽりの音鳥総松  
目の前の虹全しや冬帽脱ぐ  
狐火や鶺鴒の瀬の闇のしぶくなり  
襖褪せし部屋に通さる初音かな  
わが声を返す凍湖に佇める  
宇治川へ荃樋洗ふ水の筋

# 火星作品

## 山尾玉藻選

座りゐる鹿の流し眼雪もよひ  
大和郡山城 孝子

子の家の炬燵なりけりぬくもらず

夕笹子一升瓶で酒を注ぎ

三日はも昼間さびしき炬燵かな

水仙忌修し寒さのさだまりぬ

初山河子はふるさととして仰ぎ  
神戸深澤 鱻

湖心なるべし一月の竹生島

舌焼いて越後振りなる粥柱

松に倦みたる雪吊の揺れやすし

磐座にくぼみありけり寒施行

熊笹の丈に風立つ厄詣  
八幡大山文子

独活小屋に人の気配の四日かな

回廊を闍曲がり来し寒土用

うす闇に手が出て厄の薪足す  
柴垣に闇降りて来し厄詣  
成人の日の風荒き堤かな  
福笹の肩とゆきあふ月の坂  
雪達磨月にひしやがれぬたりけり  
餅花の影の萎えぬし夜の豊  
小説を伏せぬとほくの森に雪  
はらからのまなざし寄する繭だんご  
巫は指を見せず破魔矢かな  
霜除の藁の市松模様かな  
うちうみに午後の日さす雪囲  
床の間のおこし火に待つ柩かな  
着ぶくれて左右に揺れぬ鈴の前  
雪のせて二日の山の霽れてきし  
人の日のすでに淋しき手足かな  
女正月荳石一つづつ下す  
寒肥や母の椿で了りとす

宝塚山本耀子

八幡坂口夫佐子

宝塚蘭定かず子

# 選のあとに

山尾 玉藻

子の家の炬燵なりけりぬくもらず

城 孝子

いつまでたつても親は息子や娘が気掛かりで、つい彼らの家庭を覗いてみたくなる。しかし実際には、そこはもはや息子や娘の領域であり、自分がその場にそぐわぬ存在のように感じて複雑な思いとなる時が多い。「炬燵なかなかぬくもらず」の感覚にはそのような心理が大いに働いているのである。

初山河子はふるさととして仰ぎ

深澤 鱧

その地に生まれ育った者ならば、「初山河」という新玉の思いに故郷に対する特別の感慨が重なることだろう。掲句、作者が山河をただ目出度い思いで眺めていたのに対し、傍らに立つ子は故郷の山河として一層感慨深く眺めていたのである。子がふと口にした「ふるさと」という言葉になるほど気付かされた作者であるが、同時に吾が子と故郷を共有し得ないという事実には微妙にところが動いたのかも知れない。

熊笹の丈に風立つ厄詣

大山 文字

ほかの笹と比べて幹が細くても強靱な熊笹は、風に吹かれると比較的大きな音を立てる。また秋には葉の縁が限取りを

したように白っぽく枯れてくる。枯れてごわごわした熊笹が風に吹かれてがさがさと鳴る様子はいかにも寒々しい。そんな熊笹の景を眼にすれば誰でも少々ところが塞ぐものだが、厄詣での道すがらなら尚更であろう。熊笹に不意をつかれたようにあたふたと参道を急ぐ作者が見えてくる。

成人の日の風荒き堤かな

蘭定かず子

抛りだしたような詠みぶりではあるが、いかにも「成人の日」に相応しい眩しいような光景である。成人式へ急ぐのか、それとも式の戻りなのか、堤を行く若者たちの明るい声々が風に散って輝き、娘さんたちの晴れ着の袂が美しく靡く、そんな光景を思い浮かべる。そして、輝きながら遥かに伸びる風の堤は、若者たちのこれからの果てしない道程と希望と夢を象徴しているようでもある。

うちうみに午後の日さす雪囲

坂口夫佐子

一読、奥琵琶湖の小さな漁村菅浦を思った。掲句も比較的雪雪を凌げる内海に沿う寂しげな村落の景であろう。午後になつて漸く日が射しこみ、それまで雪を被り静まり返っていた村落がようやく輝き始めた様子である。それと同時に、それぞれの雪囲の中の人の動きや声々がこころなしか活気づいたように感じられる。こころ和む叙景句である。



# 恒星圈

同人 I

小林成子

二三筋畝立つてゐる淑気かな  
初辰の千年楠をめぐりけり  
遠き子の絵馬を掛けおく四温かな  
鱸酒の器の不揃ひにゆきわたる  
たひらなりけり葉牡丹を抜きし跡

加古みちよ

坂口夫佐子

晩年のこころさやかに冬木の芽  
午後の日をわづかに捉へ冬木の芽  
太箸を上手に使ふ手となりぬ  
太箸に夫あらぬこと娘のあらぬこと  
初明りいのち確かめぬたりけり

寒晴や枝しづかなる櫟山  
髪赤き二月礼者でありにけり  
しぐるるやもう誰も見ぬ鴨の陣  
空つぼの舟屋のぞきし朧かな  
海猫と鵜のへだたりに春兆す

川崎尚子

城孝子

戎社の幟吹かるる夜鳴蕎麦  
鈴の緒の紅袖に触る初比叡  
福笹の鯛改札を泳ぎけり  
熱あれば母ひとりじめ春の雪  
来てみれば放生川の涸れてをり

数へ日の水音やさしき蟹満寺  
凍土のひかり初めたり餅配  
夕晴の竹馬鳴らし来たりけり  
望に触るるたびに鳴りけり戎笹  
福笹に車中の空気うごきけり

# 獅子座

山尾玉藻推薦

涼野海音

川端俊雄

西村節子

着飾れるひとの中なる風邪心地  
冬木の芽病衣まばゆく乾きけり  
春を待つベッドに近き東山  
水鳥に日向とぼしき后陵

藤田素子

笠置早苗

屋上の隅に鳥居のある寒暮  
一月の光生まるる五十鈴川  
センター試験始まつてゐる雪だるま  
赤福本店大寒波居座りぬ

井上淳子

福本郁子

厄神の太鼓に舞へり初鳶  
女正月ブーゲンビアもも色に  
風花や鳥の巢の口乾きぬ  
ブルーベリーの紅の葉や初日射

サボテンの花赤々と寝正月  
グラウンドの隅々に差す初日かな  
シヨベルカー止まりしままや初景色  
草の上のカヌーに冬日差してをり  
ちちははの枕屏風を干しにけり  
ひと叢の峡の裏白初日さす  
初売や棚に並べる大茶筒  
寒行の影のひたすら二年坂  
大寒の昼月淡し天あををあを  
日当りて枯葉の廻りはじめたり  
寒林の枝打ちぬたる影長し  
冬霧の匂うて来たる孕み鹿  
大楠に声かけあうて注連飾る  
寒禽や工事現場の工程表  
雪ぐれや大たはし吊る荒物屋  
波ひかり沼島ひかりて野水仙